于秋、入春反僵也、これも大かたは似たる法ながら、水を灑ぎ煖むる故、ことなるべし、

〔堤中納言物語〕むしめづるひめ君

てふめづるひめ君のすみ給ふかたはらに、あぜちの大納言の御むすめ、心にくゝなべてならぬさまに、おやたちかしづき給ふことかぎりなし、此ひめぎみのの給ふ事、人々のはなやてふやとめづるこそはかなうあやしけれ、人はまことあり、ほんちたづねたるこそ心ばへをかしけれとて、よろづのむしのおそろしげなるを取りあつめて、これがならんさまをみむとて、さま〴〵なるこはこごとにいれさせ給、○中略かはむしはけなどをかしげなれど、おぼえねばさう〳〵しとて、いほしり、かたつぶりなどをとり集めて、うたひのゝしらせてきかせ給て、我も聲をあげて、かたつぶりのあいのつのゝあらそふやなぞといふことをうちずんじ給ふ、わらべの名は、れいのやうなるはわびしとて、むしの名をなんつけ給たりける、けらを、ひさまろ、いなかだち、いなごまろ、あまひこ、なんなどつけて召しつかひ給ける、かゝる事世に聞えて、いとうたてある事をいふ中に、あるかんたちめのおほむこうちはやりてものおちせず、あいぎやうづきたるあり、このひめ君の事を聞きて、さりともこれにはおぢなんとて、おびのはしのいとをかしげなるに、くちなはめの形をいみじく似せて、うごくべきさまなどしつけて、いろこだちたるかけぶくろに入れて、むすびつけたるふみををみれば、

はふ〳〵もきみがあたりにしたがはんながきこゝろのかぎりなき身は、とあるを、なにごゝろなく御まへにもてまひりて、袋などあくるだにあやしくおもたきかなとて、ひきあけたれば、くちなは首をもたげたり、人々心をまどはしてのゝしるに、君はいとのどかにて、なもあみだ佛なもあみだ佛とて、さうぜんの親ならん、なさわざそとうちわなゝかし、かほゝかやうに、なまめかしきうちしも、けちえんにおもはんぞ、怪しき心なるやとうちつぶやきて、ちかく引きよせ給